



1988年(昭和63年)  
11月号(No. 521)

社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club  
定価一部 150 円

### 目次

|                 |      |
|-----------------|------|
| 三国友好登山の課題       |      |
| 山田二郎            | (1)  |
| 海外の山            | (2)  |
| 「クックとピアリー」      |      |
| 「海外山岳 100 登頂達成」 |      |
| 二つのロープウェイ計画     |      |
| 自然保護委員会         | (4)  |
| 東西南北            | (5)  |
| 「亡き人のために」他      |      |
| 三国友好登山によせて      | (6)  |
| 宮崎県丸笹山考(渡部智俱人)  | (8)  |
| 図書紹介            | (10) |
| 「山人の賦Ⅲ」ほか9点     |      |
| 藤島玄先生を悼む 上村幹雄   | (14) |
| 報告              | (16) |
| 福岡支部、婦人懇談会、     |      |
| 北海道支部           |      |
| 図書受入報告 図書委員会    | (17) |
| 会務報告            | (17) |
| 新入会員・会員住所変更など   | (18) |
| ルーム日誌・会員異動      | (19) |
| お知らせ            | (19) |
| 総務委員会、科学研究委員会、  |      |
| 集会・婦人懇談委員会      |      |

### ▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時  
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

### ▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日  
13時～20時

お知らせテラフ電話

234 六六五九

## 三国友好登山の課題

山田 二郎

エベレスト三国友好登山の成功を祝う祝賀会と報告会が去る六月十七、十八の両日にわたって行なわれた。私も二つの会に出席して、このところ数年、旧知の間柄となった中国、ネパール両国の関係者の方々にお目にかかることができ、心からのお祝いを申し上げたのだが、その時の彼等の晴れがましそうな喜びに満ちた笑顔に接するにつけ、ヤレヤレ本当に良かった、と深い感慨にひたったのは筆者のみではあるまい。

私がエベレスト交叉縦走について最初に話をうけたのは、たしか創立八十周年記念パーティーの席上で、湯浅氏か

ら「山田さん、エベレストを北と南から交叉縦走しようという計画があるんです。いずれ山岳会(本部のこと)にもお世話になることになるかと思ひますので」とのことだったと記憶している。当日は「ああ、そうですか面白いプランですね」くらいの極めて無責任な外交辞令的なうけこたえをしただけで、活発な東海支部のことだから、いずれ支部の計画として実施する段階では、本部としてもバック・アップしてほしいくらいのこと、その根拠しなんだろうと思ひ、余り深刻には受けとめていなかった。

ところが、暫くすると読売新聞社か

らは内々にはあったがエベレスト交叉縦走計画に対してはグループを挙げて支援する用意ありといった誠に有難いが戸迷うような申し出があったり、東海支部からは「これまでいろいろといきさつはあるが、一応白紙の状態で計画を本部に委譲するのでぜひ引き受けてほしい」との正式申し出をうけ、私としても何となく向う岸の出来事と思つていたものが、何時の間にかこっち岸へ移つて来てしまい、正直いつて戸惑いをかくせない状態に追い込まれることとなった。大塚副会長とも相談したが、彼の見方も大体私に似た感じであった。

今日までの私の経験からすれば、ヒマラヤ遠征などというものは誰か、又は或るグループが自分達の惚れ込んだ山なり、ルートなりを登ろうという強烈な意志があつて準備をし、メンバー

誰か登る奴はいないか式の進み方には面喰つたものであった。

東海支部から計画委譲について本部にみえた尾上支部長、湯浅氏には甚だ失礼なことではあったが「ディナーテーブルに皿とナイフ、フォークは揃っているかも知れないけれど、一体誰が何を食おうとしているのかはつきりしない計画なんてものがありますかねえ」と私の戸惑い振りをぶちまけたこともあった。

然し、何はともあれ東海支部からの委譲を受けた以上、この計画をどう評価し、どう取扱うか、本部として方向を決める必要に迫られたので、海外登山などに経験と関心が深いと思われる方々にお集り頂いて忌憚ないご意見をうけたまわることとした。お集り頂いた方々からは真剣なご意見ご提案を頂いた。「面白い、独創的な計画だ」と

## 海外の山

## クックとピアリー

いったものから「時代錯誤の山登りをJACともあるうものが何で採り上げるのか」といった批判、「もうひとひねりして近代的で、チャレンジングなプランと抱き合せてはどうか」といった色々な意見が出された。私としてはそのどれもいちいちもともとでもであって迷いは深まるばかり、あげくの果ては、ことの起りが初めから余り唐突で、個人的には大して気も進まなかったせいもあって、此の計画自体雲霧消散してくれたらういぶんせいせいするだろうなどといった無責任極まる気持にすらなる有様であった。

そうこうするうち、中国登山協会の史占春主席以下のお歴々が別の用件で来日されるので一九八〇年のチョモランマ登山以来のお礼も兼ね、一夕食事を共にしての歓迎を行なうこととなった。ところが席上、史占春主席から「日中ネ三国のチョモランマ・サガルマタ交叉縦走には日本山岳会の参加が是非とも必要であり、日本山岳会にはこの企てを成功させる責任と義務を期待する」といった内容のご挨拶があった。

なるほど、そう考えればこの登山もまた別の意義を持ったものとなる。私の考えて来たことは私個人の或いは極くプライベートなグループでの在来の登山をイメージしていたものであつ

一九〇八年四月二十一日、人類として初めて北極点に「立った」時の光景を、米医師フレデリック・A・クック博士は、こう書いている。

「その寂寥たるや、まさに手に触れることができるかと思われるほどであった。人間の野望をかくも長年かき立ててきたこの場所は何と陰鬱な世界であることか」

二十歳になる二人のイヌイット(エスキモー)、エトウキシユックとアーウエラ、それに二十六頭の犬が四十四歳になる探検家の同行者だった。グリーンランドの北のアノウトクを出発してから二カ月がたっていたが、帰路はそんなものではきかなかった。南西方向に氷ごと流され、熊を仕留めて生で食って飢えをしのぎながら彷徨い、北デボン島の湾岸にあった洞穴で冬を越した。

弾丸は尽き、櫓の一部と鯨の骨で弓矢、槍、鋸を作り、石を投げてじゃこう牛と戦い、食料とした。やせほそった十頭の犬と三人が生き残ったのは、ほとんど奇跡に近かった。文明の地まで一行が生還するまでには何と十二カ月を要したのである。クックの「壮挙」が、ニューヨーク・ヘラルド紙で最初に伝えられたのは、一九〇九年九月二日になってからだった。

「北極点ドクター・フレデリック・A・クックによって発見さる」「世界の頂点にいかにしてアメリカの旗は立てられたか。ドクター・クックより本紙宛電送された手記独占掲載」

アメリカ人だけでなく極地に関心を持つ世界の人々を感動させたこのニュースは、五日後、どんでんがえしを

食う。九月七日、ニューヨーク・タイムス紙は、米海軍中佐、ロバート・ピアリーからの電報を掲載したのである。

「四月六日北極点に到着。九月七日シャトー湾に到着予定」

北極探検に十六年間を費やしてきたピアリーにとつて、クックの極点到達は到底認めがたいものだった。どちらが本当に、あるいは先に北極点に立ったのか二人の間だけでなく、マスコミ、地理学会、そして支援者たちの烈しい論争が始まり、米国地理学会は決着をつけるため特別小委員会を設置した。一九〇六年に北米大陸最高峰マッキンリーへの初登頂を発表、後になってその事実が否定されたこともクックにはマイナス材料になった。クックは追い詰められ、地理学協会はピアリーに軍配をあげた。北極点探検史でクックの名は抹殺され、ピアリーの名は、同行した黒人マシユー・ヘンソンと共に氷久に残されることとなった。

七十九年を経た今年十月十二日付のワシントン・ポスト紙はボルチモアに住む天文・歴史学者、デニス・ローリンズの主張を全面的に掲載した。

「ピアリーの当時のノートを入手、検証した結果、彼は極点には行っていない。一九四キロ手前の地点で断念し、そのことを隠し通した」。あれほどの大論争の末の結論が、八十年たつてあっさり否定されるとは、「史実」とははかないものである。

北極点には何もない。そこは絶え間無く漂流する氷上の一点にすぎず、そこを正確に認定できるのは、人工衛星ぐらいのものだ。(ヒュー・イームズ著「完全なる敗北」を参考としました)

(江本嘉伸)

海外の山

た。然し考えてみればJACをはじめ日本の海外遠征は夫々の個人、または団体が、自分達の山登りを計画し諸外国の山に登らせてもらうことが殆んどである。殊にネパール、中国などでは、戦後のマナスル以来ずいぶん無理を聞いてもらい、いろいろの好意に支えられて数々の山登りをさせてもらって来たが、さて振り返ってみると夫々の国、ないし国の人々のために何をして来たか。極く二、三の例外を除いて殆んどこれといって何もしていなかったわけで、自分達だけで勝手にその国の山に登っておきながら、今度は夫等の国の人々から一緒に登ろうと持ちかけられて之に応じないとは如何にも自分勝手なこととのそしりは免れまい。

こう考えることで漸く私の心も決った。「時代錯誤、百も承知、だがこのような背景を持った今回の企てをまゝめるとなれば日本山岳会を措いて外にはないではないか」確かに個々の登山技術面でみれば、今日、日本国内にはもっと先鋭的な山登りをしている団体はいくらでもある。然し国と国とのおつき合いを考えれば、とてつもなく意義深いこのような一見馬鹿馬鹿しい山登りはJACだからこそ実行出来るし、またその責任を負わされていると考えるべきなのである。

それに、異なる歴史、異質の文化を

## 海外の山

## 海外山岳一〇〇登頂達成

脇坂順一

去る八月十七日、かの難峰マッターホルンに登頂し、かねて念願の海外の山の登頂ピークの延べ数が一〇〇になった。このことも非常に嬉しかったが、それにも増して歓喜に堪えなかったことは、満七十五歳五カ月の身でこの山に登頂出来、一〇〇登目を飾り得たことであつた。五年前この山の頂上で古稀祝(第一〇登目)をした時に比べて、さすがに体力的な衰えを感じたが、頑張り通して遂に目的を達し得たことは何よりの喜びであつた。ツェルマットのガイド事務所に登山証明書を貰いに行つた時の話では、大ていのお年寄りや、体力的に自信の無い人は、途中のソルベ小屋に一泊して二日がかりで登っているが、麓のヘルンリ小屋から日帰りで頂上を往復した中で貴方は最高年齢だ、と右手の親指を突き出して誉められ、些か悦に入つた。

思えば山に登り出してから既に五十五年になる。然し初めて海外の山に登つたのは昭和三十六年の夏、四十八歳の時であつた。英国における国際外科学会に出席講演したついでに、かねて憧れのマッターホルンなど四つの山に登り、これが病みつきになつて機会あるごとに登り続け、ヨーロッパアルプスのみでは飽き足らず、メキシコ、南米、北米、アフリカ、ニュージールランド、パプアニューギニア、ボルネオ、イラン、トルコ、アイスランド、中国、北極圏等にも足を伸ばし、二十七年かかって塵も積もつてやっと一〇〇に達ぎつけたわけである。

人は私を「超人的」とか「怪物」とか更に口の悪い人は「化け物」などと言っているらしいが、これはほとんど

もないことである。私は決してそんな者ではない。本当は普通の平凡な人間であり、唯のお爺さんなのである。ただ或る夢(目標)を持って、それに向つて精進を続けて来た、というに過ぎない。夢の無い人生は淋しいといえよう。夢を持ったからには、その実現のために弛ゆまぬ周到な準備を積み重ねて行くことである。そうすることによって、その夢は大い叶えられるように私は思うのである。そしてこれは山だけに限らないのではなからうか。

私自身以前は身長一六〇糎なのに八〇疋の肥満体であつた。そこで昭和三十年の元旦から一大決心の下に毎朝冷水摩擦と全身運動を始め、これを今日まで殆ど毎日欠かさずやっている。それ以来風邪も引かなくなり、食事療法と相俟つて体重も五年後には五八疋内外に減つてこれを維持し、体調は頗るよろしい。意志の力を要するのは最初の一カ月で、あとは習慣になつて、洗面と同じようにこれをやらぬと気が悪い。また、努めて歩くことにし、エレベーターには乗らず階段を上下する。これも毎日やるのが大切である。山好きの私は一〇〇登山を打切ることなく、今後は主として氷雪の山に親しみたいと思つている。



マッターホルン山頂の脇坂氏



持つ三国の人々が一つの山登りを共にすること、それに参加する人々には単に山登りの技術だけではなく経験も積むチャンスも必ずや生れて来るはずではないか。また登る側の技術、経験は著しく進歩しているとはいえ、大自然の中のエベレストは一九二一年にマロリー達が行ったときと何も変わっていないわけ、登る場面場面ではエベレストならではの厳しさに出くわすことは間違いない。このことは若手の隊員の個々にとって新たな経験を意味するであろう。

このような考えに到達した私は誠に晴れ晴れとした気持ちでこの企てを納得することが出来た。ただ、私としてはこの計画の半ばで役員の任期を迎えることを考え、大変勝手ではあったが、今西会長、大塚副会長にリーダーシップを採って頂き、側面から心ばかりのお手伝いをさせて頂くに留まった。

長く困難な事前打合せと、繁忙を極めた諸準備、隊員の入選を経て、この企てにかかわられたすべての人々の努力と各方面からの協力の結果、五月五日予定通りの交叉縦走を見事、果たされたことは高く評価されるものと思う。殊に現地で言葉も満足に通じない人々とチームを組んでこの困難に立ち向い、見事に克服された隊員各位には心から「ご苦勞様」と申し上げたい。

一九五二年以来のヒマラヤでの数々の山登りの義理をネパール、中国にもこれで果たすことが出来たわけだ。登山実施面での細部を採り上げれば検討すべき事柄はいくつか見当るように思われる。これからはJAC内部としてこの登山をどう意義つけて行くか

## 二つのロープウェイ計画

### 自然保護委員会

自然保護委員会は七月二十日、屋久島の縄文杉の観光を目的としたロープウェイ建設計画の中止を求める要望書を環境庁に提出した。

縄文杉は昭和四十一年に発見され、推定樹齡七千二百年、世界最長寿の古木ということで霧島屋久国立公園の中心的存在となっている。

過疎に悩む上屋久町が、川崎製鉄の協力を得て、この縄文杉を観光の目玉とするロープウェイの建設を計画しているが、その内容は宮の浦から白谷林道を経て、標高七百メートル地点に山麓駅を設け、島中央部の高塚山近く千三百メートルの地点に山頂駅をつくり、その間の二千二百メートルを三本の鉄塔とロープウェイで結ぶ。山頂駅から縄文杉までの約一キロは高床式の遊歩道をつくって、三十分歩けば行け

が重要な課題となろう。帰国後の報告会でも今西会長はじめ幾人の方々指摘しておられる。またこの企てに加わられた若いクライマー達が将来のJACを担う貴重な宝となれることを切に願っている。

るようにするといふもの。

現在は林道の終点から縄文杉まで、険しい道を歩いて五時間以上かかる。それでも年間七千人前後の登山者が訪れて、周辺の土地を踏み荒らし、縄文杉は手の届く範囲の樹皮がはがされて、マジックで落書きまでされている。また屋久島は雨が多く、土壌が流出して、大きく広がっている縄文杉の根の部分が露出してきたため、根部のまわりに木片を敷きつめるなど、保護措置を構じているが、それでも枯死と倒壊が心配されている。

このような現状からみて『ムラおこしの計画に水を指す形となるが、次代に残す国民の遺産として、縄文杉と屋久島の自然を外すわけにはいかない』というのが山岳会の立場である。しかし計画を推進している上屋久町、川崎

製鉄は『過疎対策をどのように考えるのか、現在は監視が行き届かず、縄文杉は野放し同然だ。ロープウェイを建設して、監視を万全にする。遊歩道は縄文杉を遠巻きにして、近くには立ち入らせないようにすれば、現状より縄文杉のためになる』(川崎製鉄地域開発グループ竹谷課長談)と登山者のマナーの悪さを突き、自然保護への配慮を強調している。

山岳会の要望を受けた環境庁は『国立公園の区域外にあるロープウェイ建設は規制の方法がないが、特別保護地区にある縄文杉周辺の遊歩道は認めない』(山内自然保護局長談)方針を打ち出し、屋久島の国立公園地域を管理している阿蘇くじゅう国立公園管理事務所を通じて、上屋久町に「遊歩道規制」を通告している。しかし縄文杉は、現状でも登山者による人災で危険な状態にあり、登る人のマナーも、また厳しく問い直されている事実を忘れてはなるまい。

屋久島の縄文杉をめぐる開発と、自然保護の話し合いは、これからも続ける必要があるが、話し合いと並行して、早い時期に縄文杉の周辺は、立ち入り禁止の柵を設けるなどの措置が必要であろう。

ロープウェイ建設計画では、北アルプスの槍、穂高の展望台として人気の

昭和63年7月20日

国務大臣 環境庁長官  
堀内 俊夫 殿



## 要望書

それが更に大勢の人が安易に見物におしけることにより、次代に引き継ぐべきこの世界的な縄文杉が致命的な影響を受けるばかりでなく、周辺の巨木老杉や、ひいては屋久島の亜熱帯から亜高山帯に亘る植物の垂直分布で知られる植生、そこに生息する野生動物など自然生態系にも悪い影響を与えかねません。

また、屋久島の国立公園の中心部は九州の最高峰宮之浦岳(1935m)をはじめとする山岳地帯であり、この地域へも大量の利用者がおしけることによる自然への改変、ゴミの投棄、シ尿の排出、等環境への汚染、さらには、遭難の多発問題なども起こる可能性が考えられるなど、国立公園の自然環境を破壊する虞れがあり、深く憂慮するものであります。

我が国に残された数少ない貴重な原始的自然が、この観光開発によって傷つけられようとしていることは問題であります。

そして特に過剰なまでの利用によって自然破壊が引き起こされている例は、現在、日光国立公園・尾瀬でもすでに問題になっており、いまその対策が検討されていることから思い合わせて考えるべきであります。

つきましては、以上の事実と経緯をふまえ、本計画につきましては、慎重にご判断いただき、実現することのないよう特段のご配慮を賜りたく、ここに要望致します。

なお、この要望書は次ぎの関係省庁等に送付致しました。

国務大臣環境庁長官  
運輸大臣  
林野庁長官  
鹿児島県知事  
林野庁熊本管区局長  
阿蘇くじゅう国立公園管理事務所長  
鹿児島県熊毛郡上屋久町町長  
上屋久宮林署長

堀内 俊夫 殿  
石原 慎太郎 殿  
松田 堯 殿  
鎌田 要人 殿  
梶 道雄 殿  
羽賀 克己 殿  
荒木 健次郎 殿  
山 元 秀 記 殿

ご承知のように屋久島の縄文杉は昭和41年に発見され、世界最長樹齢の古木として注目されており、また、その他の高樹齢の巨木のヤクスギの原生林は、アメリカのセコイアの巨木群と同様に世界の至宝として知られているばかりでなく、同国立公園の中心的存在であります。

さる6月24日、鹿児島県熊毛郡上屋久町は、かねてよりマスコミ等によって伝えられていた屋久島の「縄文杉」に向けたロープウェイの架設計画を公表しました。

本計画は地元の経済的活性化を図るために観光の目玉として進められているもので、霧島屋久国立公園・屋久島の高塚山(1396.3m)北斜面(国立公園区域外の国有林内)にロープウェイを架け、そこから縄文杉まで1駅の遊歩道を作って観光客を運ぶというものであります。

現在、縄文杉まで徒歩で片道5時間の行程で年間6~7千人の登山者が訪れていますが、このロープウェイの架設計画によると、1時間足らずで行けることになり、上屋久町では稼働初年度(昭和66年)で11万人、以後毎年10%ずつの増加を予測しています。

もしこの計画が実現されると、この縄文杉に至る遊歩道は国立公園の重要な地域、特別保護地区内を通ることになり、しかも今より圧倒的多数の利用者がこの縄文杉を訪れる事になり、様々な影響が考えられます。

すなわち、縄文杉は発見されて以来、見物しやすい様に周囲の樹木は伐採され人の踏み付けや多量の降雨による土壌の流失などで根元が露出し、現在枯死が心配される状態です。

高い「蝶ヶ岳」まで、安曇野側からロープウェイを架けようという計画が、ひそかに進行している。中部山岳地域では、中央アルプスの千畳敷と、西穂高岳の飛騨側からのロープウェイが、二つとも成功して、繁盛しており、蝶ヶ岳のロープウェイも、地元関係者は成功を確信しているようだ。

山麓の豊科町が地域振興の目玉とし



亡き人のために

望月 達夫

去る五月中旬の「天声人語」に九十七歳で亡くなった津田正夫さんのことが出ていた。津田さんは三十年ぐらいい前、時の外相藤山愛一郎氏に請われてアルゼンチン大使となり、『緑の館』の作者W・H・ハドソンの生家の修復に尽力した、異色の大使であったというようなことが書かれていたと記憶する。

私は、もう三十数年前になるが『山

て期待するのは、最近のリゾート・プールの影響である。しかし安曇野は高地や堀金村でウエストン祭を行なっている。松方三郎氏の随筆によれば、ウエストンは「上高地に帝国ホテルができた」と聞いただけで、その俗化に涙を流した人である。ウエストンを偲び、顕彰しながら、観光施設を整備するのは、ウエストンへの冒瀆である。

岳』48年に「セガンチニの跡を訪ねて」という佳篇を、津田さんから寄稿して頂いたことを、すぐ思い出した。同盟通信で一緒だった松方三郎さんの紹介だった。津田さんはJACの会員ではなかったが、セガンチニやハドソンに心をひかれた方だし、松方さんのような友人もいたから、JACのことは忘れることがなかったであろう。

それで私が思い出したのは、終生JACの会員にはならなかったが何かにつけて会のことを思い、協力を惜しまなかった、或る意味では会と近しい関係にあった何人かの先輩のことである。

すぐ頭にうかぶのは野尻抱影氏である。野尻さんのことは、亡くなったあとと川崎精雄、宮下啓三の両氏が、ねんごろな思い出を会報「山」三九三号(昭和五十三年三月)に寄せられているので、私がここに改めて綴る必要はなからう。ただ、同氏晩年の随筆集

三国友好登山によせて

## 見せものサーカス登山はもう沢山!

中村 テル

六月十七日のホテル・ニュー大谷での三国友好登山の打ち上げパーティーも無事にすみ、登山した人々、それを色いろと支えて来た多くの日本山岳会の同志に、この夜、心からの謝意を表しました。

思いがけなく、当日、私まで壇上によりあげられ、友好登山に深く関係した人々にメダルを首から懸けてあげる光栄に浴した一人でした。

「枯木も山の賑いですね」と言いながら壇上に登り、一人一人の若人にメダルをかけながら、

「おめでとう、ご苦労さまでした。サーカス登山はもうおしまい。今度からは、しつとりした静かな登山をして下さい。今度の経験を生かして」とめいめいにそつとお願いをしました。

そそっかしい友達の一人在私に訊きました。

友人「三国登山なんてエラーイイことをやったもんだね、でも、こんな大きな登山に日本山岳会員は誰も行かなかったんだね」。

私「そんなことないわ、みんな手伝ったし、金も出したのよ」。

友人「え、新聞社の丸抱えかと思ったよ、いやにY新聞とNTVばかりが派手に出たからさ」。

私「だって、みんなの山登りは、仕事だもの。職業だもの。登山して、見せるのが彼等の商売だもの。考え方が違うからしょうがないわ」。

友人「へえ、そうかね、あんな登山は、本当の登山だと

思わない人が大部いるんだけどなあ……」

もう鳴物入りの登山はあれで沢山。登山は、矢張り少ない、気の合った者同志か、又は独りで、しつとりとしたのしむものかと思っている私です。

今度の会員たちの協力は本当に素晴しかったと信じ、この経験を「本当の登山」に生かしてもらいたいと思っています。

もう一度申し上げます、皆さま、本当にご苦労さまでした」。

\*

## 編集宛

チョモランマ／サガルマタ 三国友好の登頂成功おめでとうございます。

日本山岳会の一大壮挙、そしてNTVの生中継の画期的、歴史的偉業おめでとうございます。貴兄らの陰の貢献の大なること容易に察しがつきます。

小生などより数倍の喜びを噛みしめておられることと思います。

五月五日、子供の日に、日本中の子供たちに限りない勇氣と希望と夢を与えてくれたこの一大エポックは、小生にとっても、子供たちにとっても、忘れることはありませんまい。そして世界中の人々に対しても、この壮大な計画と実行は、二十世紀末最大の快挙として記録をとどめることでしよう。

また、その会の会員の一人であることを、小生は心から有難く誇らしく思っています。

五月末には残雪の山に入ります。今年はいつより雪

『鶴の舞』を、いま私は時々繙いていることを付け加えよう。

いま一人は岡山俊雄さんである。同氏は「日本の山地地形の研究」で昭和五十六年度の秩父宮記念学術賞を受けたが、私としてはそのパーティーでお目にかかったのが最後になった。岡山さんは、わが国の氷河問題のことや、尾瀬の紀行を古い『山岳』に書かれたり、一九六二年版『山日記』に「地図使用上の注意」を執筆されたりしたが、最後の寄稿は『山岳』63年の「W・ウェストン『日本氷河遺跡論』と明治十年代前半の氷河不存在論その他」と題する三十余頁の論文であった。

藤島敏男さんが大正十四年五月に守門山、浅草岳、御神楽岳に登った時の同行者で、『山岳』19年3号に載っている藤島さんのとった写真の中に、岡山さんの後姿が大きく写っているのがある。このような岡山さんが会員でなかったことが、むしろ不思議なくらいだ。

会としての年齢が八十余年に達するJACは、いつの時代にも熱心な会員によって支えられ、発展してきたことは、改めて言うまでもないが、会員でなかった人々からも、少なからぬ支援を受けていたことを忘れてはなるまい。

が多いようです。

末筆ながら、貴兄らの健康をお祈りいたします。

会としての華々しい行事に打ちこむことは、会本来の使命でもあろうが、時には、先のような会員でなかった亡き人々にも、JACはあたたかい目を向けるような会であってほしいと切に思う。

## 「にど・だもれ」

元海外委員牧野文子さん夫妻を偲ぶ会と、回想集「にど・だもれ」(イタリア語で「愛の巢」の意)出版記念の会が去る九月二十二日、目白台、同仁キリスト教会で催された。当夜は六三名の多数の方々が参加、牧野夫妻の交遊の多彩さを偲ばす素晴らしい会であった。JACより武田満子、山口節子、早川瑠璃子三名が参加した。

当日の集りのため送られてきた文集編集委員会の案内状には次のような文が認められていた。

「人間らしく心豊かに生きた青年時代から晩年までのお二人の姿を百人以上の方々がそれぞれの言葉で語って下さったお陰で、単なる回想を越え、現代にひとつの生き方を示す興味深い本となっております」

また、この本は読売、その他の新聞

でも紹介された。

「にど・だもれ回想 牧野四子吉・文子」四六版、上製箱入、五三〇頁、定価二九〇〇円、送料四五〇円、ご希望の方は日本山岳会事務局宛現金封筒で。

(海外委員会)

## 大雪にて

小林 碧郎

雪形の白鳥翔て明やすき  
駒草や熔岩礫々に露しぐれ  
偃松の花粉けぶりぬ星鴉  
縞栗鼠の馳せて花散るなゝかまど  
熊除けの鈴鳴り熄みぬお花畑  
(六三・七・十七〜八)

## 四十六年前の回想

山口 一孝

本年四月麻生武治先生から、逆光の凍結したスングアリー(松花江)の上をトロイカがシルエットとなって走る美しい写真が送られてきたが、その裏にはつぎのお手紙が記されていた。一、只今電話にて申上げた如くスキーの友達で建築技師をしている友達が休暇で旧

A 生

三國友好登山によせて

満洲ハルビンに行った時便りをもらった其時のエハガキです。Dog sleigh Riders on the Sungali river (松花江)。今春の光彩展には伺います。Erreich der Hof mit Muh und Not! ...Erlkönig (Franz Schubert). Bitte, bleiben Sie gesund und munter! — 私はこの写真で、昭和十七年の冬、此処で眺めていた記憶が甦えり、現地で写生するような放心状態となって水彩画を画いて光彩展に間に合わせた



が、麻生先生に差上げた案内状には、— いただいた御写真で一九四二年の冬、同地で浸った感激が甦えり、画かせて戴きました。四十六年前の冬のスングアリー上のトロイカ(ハルビン)を出品致します。その日は零下二〇度以下の日に現われる幻の太陽「Die drei Sonnen」が眺められましたのでこれも画に加えました。Schubert: Die Winterreise を Fischer Dieckau が唄う歌詞(つぎに記す)をレコードで聞きながら御教示の有難さに浸りました—と書き副えた。

Drei Sonnen sah ich am Himmel  
steh'n  
Hab' lang und fest sie angesehen,  
Und sie auch standen da so stier'  
Als wollten sie nicht Weg von mir.  
Ach, meine Sonnen seid ihr nicht!  
Schaut Andern doch ins Angesicht!  
Ja, neulich hatt ich auch Wohl drei.  
Nun sind hinab die besten zwei.  
Ging' nur die drit' erst hinterdrein!  
Im Dunkeln wird mir Wohler sein.  
(Wilhelm Müller)

次代に残そう美しい山と溪



## 三水会現地集會

アンコロ餅と菓湯の集い

九月十日、十一日と三水会恒例のアンコロ餅と菓湯の集いが、上高地山研で行なわれ、今回で十一回目を迎えるに到った。

高曇りながら穂高の稜線は良く見え、河童橋周辺は今を盛りとシオンの紫が美しい。

全員集合した十七時、腕を振るった料理と『菓湯の集い』の名のごく立並んだ日本酒、焼酎、ウイスキー、ワイン、ビールの群落を前にして、三水会の長老、沼倉寛二郎氏の挨拶と乾盃が始まった。料理良し酒良しで、食べるごと飲むほどに歓談と笑聲は高まっていく。会員ではないが、管理人さんと昵懇だという女性も飛入りして、気焔を上げている。負けじと我々も歌あり、手品ありで宴は最高峰に達しようとしている。そして、最高峰に達したのは、参加者の中で最長老であられる今井喜美子さんの長唄であった。

いつの間にか外は雨となっていた。昨年もやはり宴の半ばで雨が降ってきたのを思い出す。

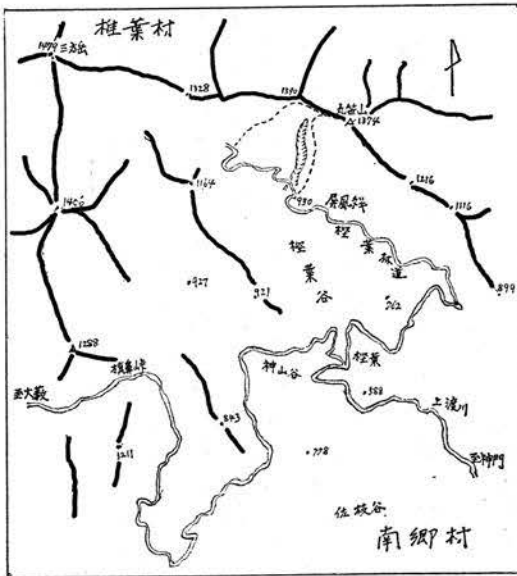
このアンコロ餅と菓湯の集いは、あまり酒を嗜まない人には、アンコロ餅は汁粉となつて出される。私事だが、

## 宮崎県丸笹山考

福岡市 渡部 智俱人

脊梁山脈の東には九州の三荘のうちのふたつ、椎葉荘と米良荘が峰々に囲まれて隣接する。この両荘に挟まれて位置する山域には石堂山(一五四七)、樋口山(一四三五)、三方岳(一四七九)そしてこの丸笹山(一三七四)などが塊をなして連なる。昨年の晩秋、宮崎県椎葉村の大河内から大藪を経て檳鼻峠(一ツ瀬川と小丸川の分水嶺)を越えて南郷村に入った。

南郷村は九州一の清流、小丸川の源流域に当り、三方を山に囲まれた盆地で、その中心地は神門である。西暦六六〇年、朝鮮の百済が唐と新羅の連合軍によって攻め滅ぼされ、百済の禰嘉王、華智王ら一族郎党は半島を脱



宮崎県南郷村の丸笹山

出、日向に漂着し、耳川をさかのぼってこの地に安住したという。ここ神門神社には王一族が持参したといわれる漢式の神獸鏡や奈良正倉院の御物と同種類の瑞花六花鏡など、三〇数点の学術的に貴重な鏡鑑や馬鐙、馬鈴が社宝として保存されているのは極めて興味深い。

椎葉村大藪からコンター一〇八〇の檳鼻峠を越える車道は南へ蛇行しながら小丸川の上流、渡川の支流を渡って七・五キロメートルで南郷村檳葉の集落に下る。ここで神門へ至る県道を左へそれ、檳葉谷を横切って北上する檳葉林道に入り、三キロメートルで屏風ダキの南下を通る。国土地理院の地図には屏風滝と記されているが、水流は全くないから滝ではなく、岩峰、岩壁のことを地方の人はダキ、タキと呼称する。その音韻から地図には漢字の滝を当てたものと推察する。流れのない岩壁ではやはり屏風ダキかあるいは屏風岩と訂正すべきであろう。

この屏風ダキ直下から林道はなお西へのびているが、数百メートルで右(北)手の上方に長大な崩壊斜面をみる。コンター九三〇のこの崩壊の右側から造林作業道をえらぶ。杉林から松林の急坂を直登すること一時間余で崩壊起始点に達す。さらにブッシュを分けて数分で丸笹山の西の稜線に上る。山名の如くミヤコザサと灌木におおわれた尾根を東進し一〇数分で三等三角点の丸笹山頂につく。山頂は鈍頂で東南から南西へかけての展望が素晴らしい。尾鈴山、鰐塚山、米良の烏帽子岳、天包山、高隈山、霧島の峰々、白髪岳、石堂山、市房山の山ながみ連なる。下山は西の三方岳へのびる稜線を探ってみたが一キロメートルも行かぬうちに密生した厚いスズタケの壁に阻まれて、檳葉林道へ下る。途中、数頭の鹿の群が横切った。猪、鹿の生息に適した環境の山域であ



酒席での甘い物は敬遠するのだが、それがこの会ではいつも戴いている。雰囲気呑まれるばかりではない。本當に旨いのである。

宴も終りに近付くころ、松茸御飯とアサリの味噌汁が出て、ほとんどの人がお代わりするほどの好評であった。

翌十一日は、昨夜からの雨がやまず現地解散となっていました。

参加者 秋山光平、荒木正弘、伊藤信夫、乾能尚、今井喜美子、岩堀瑞子、岡野修、小野利次、片岡博、勝田房治、川上光久、菊地文雄、木村俊博、久保孝一郎、小林碧、齊藤直信、坂倉登喜子、高田眞哉、滝沢ちよ子、田久保勇治、千葉保之、遠田栄・篤子、沼倉寛二郎、横溝修一、平戸孝夫、他二名 (平戸孝夫)

## 月山登山録

山形県酒田市

前田製管(株)山岳部

先日は弊社の山岳部が日本山岳会の団体会員として認めていただき本當にありがとうございました。早速ではございますが、九月三日に行なわれました酒田地区社員の月山登山の様子をご報告致します。

『雲の峰 幾つ崩れて 月の山』

と、芭蕉にも詩われた月山は、農業の神の月読命を祭ったところから名付け

るからであろう。

過日、椎葉村の大河内の大藪から三方岳へ上った折に東へのびた稜線が椎葉村と南郷村の村境界をなしているの、これを辿れば簡単に目的の丸笹山へ達するのではとルートを決めたが、尾根筋はやはり手ごわいスズタケと自然林が密生し断念してしまつた。今回あらためて南郷村からのルートを探った次第である。この丸笹山は周

られたといわれる標高一九八〇名の峰です。又、古くから羽黒山、湯殿山とともに出羽三山の中の一つとして信仰のある山でもあります。

さて前田製管(株)では去年から創立記念日である九月三日に社員全員参加の



辺に市房山、石堂山、江代山、扇山などの雄峰のかげにあり、登山者に等閑視されていたきらいがあるように感じる。山頂へ至る遊歩道はないが、樫葉林道をたどり、僅かな作業道をひるえば左程難儀ではない。山頂からの展望や稜線一帯の自然の佇まいが好ましく、あえて取り上げることにした。なお山行には本会々員である宮崎市の南里晋亮氏が同行された。

宮崎県丸笹山考

スポーツ大会を開催致しておりますが、酒田地区の本社支部では今回、月山登山を計画し、およそ百七十名が参加致しました。

当日は朝からはっきりしない天気、酒田市内から月山を眺めると、山の上半分くらいが雲に覆われておりました。そのような中、百七十名の社員はバス四台に分かれて八合目まで行き、内百名余りが山頂までチャレンジすることになりました。

バスに揺られること一時間半、朝八時過ぎには八合目のレストハウスに着。靴のひもをしっかりと締め、山頂へと出発致しました。登りはじめて間もなく弥陀ヶ原とよばれる湿原があたり一面に広がりました。九月にはいり、高山植物の季節はやや過ぎた観があるものの、黄色の花をつけたミヤマアキノキリンソウや、リンドウのむらさきの花が可憐に咲いており、目を楽しませてくれました。いつもながら一歩一歩、踏みしめる土の感触とともに身体

中がほじめて最高の顔になりきれるときなのです。時おりガスがかかる中、本来晴天であれば鳥海山、朝日連山等のみちのくの山々や真青な日本海を眺めることができるのですが、谷に残る雪渓や雄大な山容だけを眺めながら快調に山頂へと向いました。およそ二時間半のコースでしたが、一時間半から二時間で百名余りが全員山頂に着。若手社員が汗を流しながら持っていたビールで乾杯!!。そのうまかったことといったら最高の味でした。その後、頂上の月山神社で祈禱して頂き、全員で記念写真を撮り下山しました。

天気には今一歩恵まれなかったものの、会員番号一〇二一七の前田直己社長とともに皆でハアハア息切れしながら汗かいた月山登山。来年は鳥海山へ登ろうという声が聴かれ、また一人山を愛し始めた仲間ができたよう嬉しきことです。

駄文ですが先日、月山登山の報告を

終ります。

まだかけだしの者ばかりですがどうぞよろしくおつきあい下さいますようお願い申し上げます。(鈴木 聡)

フィルスト・バツハゼーで  
ヨーデルと合唱の交歓

坂倉登喜子

今年の夏は天候不順だったのに、ヨーロッパ・アルプス周辺は、八月に入って私たちの第十二回ヨーロッパ・アルプン・ツアー四〇名の一行が訪れた十日から二十一日の間、毎日快晴に恵まれて、目的のエーデルワイスの新しい群生地もみつき、スケールの大きな山岳展望と、花に埋もれた緑のアルプの牧歌的風物は、セガンチニの絵の中を行くようで、感激の毎日がまたたくまに過ぎ、全員事故もなく十二日間の行程を終え、猛暑の成田に着いてその暑さと、人の多いのに驚きました。

今年は東京周辺の他、岡山、富山、岩手、福島等遠い地方の方たちや、足の弱の奥様をいたわりながらの夫婦揃ってのほほえましい幾組かや、若い母娘のむつまじく楽しそうな姿、ビデオ撮影に大活躍の七十三歳の男性、花の写真を目的の早池峰山麓大迫山岳博物館の若い写真家等、バラエティに富んだ参加者で、レベル別に分かれてオーバ

### ◎藤江幾太郎・

ネパールスケッチ展

ネパールへ小さい善意を届ける  
為にチャリティコーナーを設けます。

●12月19・20・21日

(3日間、11時～18時30分)

●画廊アート・プラザ

中央区日本橋2・1・18

●日昌ビル1F 電274・0892

●地下鉄日本橋2分

●JR東京八重洲北5分

イロートホルンやフルツゲ峠、ツムツトやフーベル等の高原を歩きました。八月十五日には全員一緒にグリーンデールワルトからフィルスト・バツハゼーへ、花の道を写真を撮りながら歩いて、美しい山上湖畔で昼食をとった後、全員で一緒にコーラスを始めようとしている時、遙か彼方の山頂に小さい人の影が見えて、どうもそこらしい二人の素敵なヨーデルが響いてきました。私達も負けずに合唱しました。四十名の混声合唱をしたところ私たちの声が響いたらしく、手を振ってくれました。私たちも全員で手を振って呼応すると、今度は帽子を振ってくれました。そして最後にはシャツを

脱いで応答してくれました。

山の後の白雲に浮く二人のヨーデルの歌い手は、きつと大空に向って思い切り歌っていたのでしよう。私たちも仙台の音楽の沼倉先生を含めた素晴らしい声量のある方たちのリードで思い切り歌いました。このスイス人との歌の交歓は、今回のツアー中の最高に印象に残る思い出となりました。

としよしようかい



図書  
紹介

### 山人の賦Ⅲ

檜枝岐・山に生きる

平野福朔・勘三郎述

志村俊司編

本書は山人の賦Ⅰ・Ⅱの続編として編集されたもので、前著がそれぞれ平野惣吉・与三郎両氏の口述とともに猟師であった。そこで今回は当時(大正から昭和初期)の檜枝岐で一時は村中の男の人がやったというヘラ、シャクシ作りと猟師と並ぶ主要な職業だった屋根葺きの仕事に生涯携った人の話をまとめることによって、自らを山人(やもうど)と呼んだ古い檜枝岐の人

今年もツエルマツトで改装展示替えされた山岳博物館をスイス山岳会のウイリー氏の好意で見学し、ザルツブルクでもモーツァルト博物館を見て、最後はオーストリアのゴウザウ周辺の山と湖を訪ね、フィナーレはミュンヘンでビールのお別れパーティーで終りました。

の姿とその生きざまを、当事者の口述による生の声を残したかったと編者はいつている。

前者は平野福朔(ふくさく) 明治三十九年四月生。後者は平野勘三郎、同一月生、共に本年八二歳になる。

今でこそ道路が整備され、各戸に温泉が給湯され尾瀬観光の北の基地として栄える檜枝岐もかつては訪れる人もなく山中孤立した秘境中の秘境であった。その厳しい自然の中で必死で生きた山人たちのこれは最後の証言だけに重みがある。語り口はおだやかだが内容は実に厳しい。

十四歳からシャクシぶち、(造り)をはじめた福朔さん。「昔はみんな貧乏だった」の冒頭の言葉は本当に切実感をもって迫る。くる日もくる日もシャクシぶちにあげられる、それでも貧しい。生活環境も厳しく二人の子供を川とダムで失う悲惨の中にあっても、山

人は強く生きた。桧枝岐は高所のため稲ができない。だから里の農家のように蕎麦仕事ができないから勢い木工に走ったのだろう。

勘三郎さんは十六歳から屋根屋に出た。季節は冬、行く先は関東。屋根葺きの項(二〇一頁以降)にその詳しい方法の解説があるが、失われてゆく技術だけに貴重な証言だと思う。

それは前者のシャクシぶち(六八頁以降)も同じだが、木地師、カヤ屋根葺きはともに理屈としては簡単だが、これらの技術には修練が伴わなければ習得できないもので、体で覚えなければならぬだけにづらい作業だ。

「あんな仕事は、今の人はやらないね」この勘三郎さんの言葉にしみじみとも諦めともとれる深い達観を感じるのである。地味ではあるが貴重な良書であると思う。

一九八八年二月刊、四六判 二二四頁 榎白社 定価一八〇〇円 (小倉 厚)

## 蝶の学名

その語源と解説

平嶋 義宏著

美しいカバの手ざわりの良い本である。

だが、ばらばらとめくって、これは大変な本であることに気がつく。結論

として、一般書ではなく生物の学名についての研究書であり、辞書である。生物には二つの名前がある。一つは日本名(和名)であり、もう一つが学名である。もち論この和名も一種の生物にいくつもつけられている場合も多い。

日本で高山蝶という名称が最初に現れるのは『山岳』第一年、第一号で、高野鷹蔵が、ヤマモンキチョウ、ベニヒカゲ、クモマベニヒカゲの三種をとりあげている。このヤマモンキチョウは今ではミヤマモンキチョウの和名で通っている。高山蝶のミヤマシロチョウは昔、タマノエチョウという美しい名をもっていた。

『蝶の学名』で、このミヤマシロチョウの学名についてしるべると、*Aporia hippia*で、*Aporia* はギリシヤ語の困難、欠乏などの意味があり、この蝶の翅の鱗粉が少しうすいところからきているとし、*hippia* はギリシヤ語の馬、又は古代人の名に由来するのではと解説している。

高山蝶といえば大雪山のウスバキチョウで代表する *Parnassius* 属が有名であるが、このバルナシウスは *Plois* の高山の名である。ウスバキチョウには *P. evermanni* *daiseisuzanus* という学名がつけられているが、種名はソ連の昆虫学者の名、亜種名は大雪山のという意味である。

私は一九六八年、カフカスの山中でアポロウスバシロチョウ *P. apollo* とクロホシウスバシロチョウを追っていた。クロホシウスバシロチョウの *P. mnemosyne* の意味を調べることもなく現在に至っていたが、この本で種名がローマー神話の記憶の神で *Musa* 女神たちの母の名に由来することを知った。

この本は宝の箱のようだと思う、どのページにも楽しい物語がばいはいっている。一つの名の由来から、ギリシヤ神話の再読へと発展するだろう。読める辞書であり、どのページでも開いてみればそれぞれに物語がある。研究者も学名の基礎的知識の項を読むことによって、学名のあつかいに慎重になるだろう。

美しい蝶のカラー写真がふんだんにはいつていたら、もっと一般人の人々に読んでもらえるだろう。

一九八八年二月四日再版、九州大学出版会刊、二六九頁、定価三三〇〇円 (塚本圭一)

カラーシリーズ日本の自然④

## 日本の山

大久保雅弘・堀口吉吉・松本健夫編著

地殻変動や化石・鉱物など、地質が専門の著者が手がけた日本の山の概説で、金森盈氏の写真の他、一般募集の写真、ランドサットの写真、地形や造山運動のカラフルな説明図が豊富に添えられている。

第一章・山の魅力では、先ず山に親しむことから始めて、未知の山への挑戦など、その間、天候や雪崩の知識の必要なことや、岩の状態や性質をよくのみこんで山に入ることなど、安全登山への配慮もなされている。

第二章・日本の山々では、山脈や火山、岩質について述べたあと、集塊岩の山、石灰岩の山、チャートの山、みかげ石の山などについて、内的外的両作用に基づく山容や溪谷の様子が説明される。

第三章・山はますます高く、は山の歴史を化石の立場から説明し、グリーンタフや数々の断層をもつ日本の造山運動やくずれ去りの足跡を追っている。

第四章・山岳氷河のつめあとでは、多少深入りして、北アルプスや日高山脈のカルド地形や、生物の遺存種についての実状を説明し、二重山稜や構造土など周氷河地形にもふれている。

第五章・山と人間では、山岳信仰を中心とした山の生活や炭焼きから山林、鉱物に至る山の資源の説明のあと、特に失われて行く原生林の問題に



ふれ、その保全を訴えている。  
山に入る人々にとって、山の魅力を知る上での恰好の入門書と云えるだろう。

一九八八年三月刊、A4変形版、一〇二頁、平凡社、定価三八〇〇円

(中村純二)

## 黒部雪山

酒井 国光著

本書は積雪期の黒部川全流域の山々をめぐる著者の山行記録集である。黒部別山周辺については著者はさきに地域研究書「黒部別山」なる本を黒部の衆とともに出版している。そのとき残されてしまった黒部の他の山域についての積雪期の記録をまとめたものが本書である。

著者の黒部に対する思い入れは強い。ここには十二月下旬から三月下旬までに行なった山行記録が十篇おさめられているが、それらに通底しているものは著者の強烈な登山観と、山岳登攀という営為に対する思い入れである。まがきに言う。「他人のトレールや標識に導かれることはなく、正に、自分の目で見て、判断して登るといふ登山の原点がそこにはあった。全くの未知という訳ではなく、そここに人間臭さを感じつつ、その場におい

ては自分達の全知全能を最大限に要求されるこの地の特殊性が軟弱な都会派登山者を惹き付けるのであろうか……」

記録は「黒部を越えて」と「黒部から」の二部に分かれており、積雪期黒部川流域の横断や遡行が数多くなされている。記録の文章には誇張はなく、むしろ平易であり叙述は坦々としている。しかし読者はその平易さを山行そのものの平易さにとり違えてはならない。その文章と多数のすばらしい写真と、そして概念図とを照応させるとき、そこには山行そのもののレベルの高さが見えてくるはずである。

本書は積雪期黒部の貴重な資料ともなっているが、また著者個人のパイオニアワークのメモリアルともなっている。「私の気持ちの中には、かの有名なジョン・ハントが世界の最高峰エベレストの初登頂時に著した OUR EYE, REST ADVENTURE に見る在るがままの山行報告と同じものを、三〇〇メートルにも満たない日本の数山の山行でしかかったのである。私にとつては、本書は MY KUROBE ADVENTURE である」。

装丁も立派で堅牢な仕上げになっている。愛蔵すべき本と言える。

一九八八年三月刊 A4変形版一七七ページ 自費出版 送料込み五〇〇〇円

茨城県筑波郡伊奈町谷井田一三八九の五 酒井国光

(田中純夫)

## すぐ役立つ

### 山の写真の撮り方

内田 良平著

昨年の一月号から十二回にわたって一年間「岳人」に連載された「山の写真を上手に撮ろう」を書き直した「撮影ポイント」を中心に、山の写真の撮り方を色々な角度から解説したガイドブック。

「撮影機材と選び方」からはじまり、第二章は、交換レンズの効用、フィルムの表現性、画面構成、ポジションとアングル、光の効果、高度感、遠近感の出し方などの「撮影テクニックの基本」。フィルムによってわずかな差があるが色調が違うことを指摘した「フィルムの表現性」や、しゃがみ込んだ位置から見つめ直すと思いがけないほど新鮮なカメラアングルを発見する場合が多い「ポジションとアングル」、思い切って天部を切りつめて画面構成をすると効果が出るという「高度感」などは、これから見せる山の写真を狙おうとする人たちのよきアドバイス。

特に第三章の「撮影のポイント」編は詳しく、「岳人」に連載された新緑、

ご来光、高原、夏山、雲、花、溪谷などの十二項目に、新しく夕日、岩壁、点景人物が新しく書き加えられ、撮影対象もひろがってきた。なかでも登山者を配置する場所と大きさ、登山者の方向性を重視する「点景人物」、斜光線や横光線を狙うとよい「岩壁」などが新しいポイントだ。

第四章の「名山撮影ガイド」では、槍・穂高・剣・立山、八ヶ岳を取り上げ、それぞれ夏、秋、冬の狙いどころを探っている。最後の章は「撮影山行のアドバイス」で、山行中の注意、アクシデント対策、フィルムの整理法まで説明されており、親切このうえないテキストとなっている。

ところで口絵のカラー八ページにはじまった本文のほとんどは、見開き二ページの項目別の解説につづき、見開き二ページのカラー作例というパターンのすっきりしたレイアウトで読みやすい。B6判で山行にもかさばらず、車中や山小屋などでも使える。また山行のたびに当てはまる二、三項目に撮影ポイントをしぼって、山の中での「実技」に活用してみるのもよい。

なお著者は日本山岳写真集団代表で著書も数多い。日本山岳会会員。

一九八八年四月、東京新聞出版局刊、一五八頁、一八〇〇円

(広羽 清)



## 支部二十周年記念誌

ヌ プ リ

## 北海道支部編

今西会長(祝辞)以下十五篇の内容を紹介する。「創立以前の北海道支部」(橋本誠二)は戦後の国体開催を契機として始まった道内会員の活動を詳しく書いてある。「支部記念行事から」(浅利欣吉)は創立以後の主要行事の報告で、五周年の十勝岳記念山行は次の「十勝岳登攀の記」(中河与一)に当日の様子が詳しい。「回顧」(奥田五郎)は中学一年生で噴火直後の十勝岳登頂に始まる登山の回顧であり、次の「回想の樽前山」(塩田輔雄)と共に、北海道の山の昔が偲ばれる。「加納一郎さんのこと」(安藤久男)「直行さんのこと」(望月達夫)「山岳会に入会せし北海道の初期会員たち」(高沢光雄)「田中澄江さん 北の山を愛す」(滝本幸夫)の四篇は何れも北海道とは縁の深い人々の評伝又は人物論で読みごたえがある。「山の店から見た登山用具の変遷」(金井五郎)は一テナント屋から出発し北大山岳部と共に発展して今日一流の登山用具専門店となった人物の苦心談が感動を呼ぶ。「知床半島の地名についての一考察―主として山名について」(吉村健次郎)「ホロホロ

山」(淡川 舜)「羊蹄山の侵蝕谷」(早川禎治)の三篇は学術的研究論文ともいふべきもの。最後は「北海道主脈縦走の試み」(新妻 徹)で十年前に宗谷岬を出発、宗谷、北見山脈を縦走して本年三月、四十七次山行で北見峠に到着、愈々大雪日高の縦走に入るという痛快無比の話で飾られている。非売品、一九八八年七月十六日発行、札幌市白石区厚別中央一条七十五―一四一〇 日本山岳会北海道支部

(河野幾雄)

## 郡上釣り

アマゴ釣りの原点

柴田 勇治著

郡上釣りとはアマゴの抜き釣りのことである。郡上の釣り方は両手持ちでサオを斜め前方に立て、斜め上流に向って水面にたたきつけるように振り込め、腰バンドの前には角度のついた受けダモをさしてビクを真後につける、魚がかかるとサオをたて水面からとびだしてきた魚を受けダモにうける。首からさげたエサ入れからエサを出してハリにつけすぐに打ちかえす。この釣り方は郡上八幡を中心にひとつの釣り文化圏をつくりあげてきた。そこにはアマゴ釣りを生業とした商売人が多く

出、なおかつ名人達人といわれる人々が輩出した。その中の六人の人達からその奥義をきいた話である。日本中にはその地方地方で特色のある釣り方をもち現在までつづいているわけであるが、その中でもこの郡上釣りほど中身がこく文化的要素までたかまつてきた釣り技もめずらしい。釣技もさることながらここに出てくる郡上ザオ、郡上ビク、郡上ダモ等使いやすさの形のうつくしい道具類もみのがせない。それらは永年の経験により材料を吟味し長い時間かけてひとつひとつ作りあげたものである。この六人の名人達の話は、郡上釣りをあらゆる角度からほりさげ、その真の釣技をいいつくしている。たんなる釣りの技術書とくらべて、その経験から出てくる話だけに大きな説得力を持っている。

今年のアユの解禁に天竜川にいったらこの郡上ダモが釣り道具屋にうられていていまでもこの釣り方が人気がある。それはやっているらしい。この本を読み終って釣り好きの私はすぐにでも郡上八幡にいった郡上釣りをしたい気持ちでいっぱいになった。

一九八八年二月二十日、山と溪谷社刊、一九二頁、定価一、六〇〇円

(中川 武)

## 空撮 日本の名峰

パノラマ写真に

よる鳥瞰図集―

大森弘一郎著

海外出張の間、たんねんにページをめくっての感想は、「百聞は一見にしかず」である。巻頭の紹介文に、つぎのようにある。「本書の写真は、著者自作のワイドカメラ三台と、自ら操縦桿をにぎるセスナ機の機動力を駆使して、十数年にわたり日本の山嶺を撮り続けてきた作品の中から、選りすぐり集大成したものです。普通の航空写真とは違い、登山家であり、カメラマンであり、パイロットである著者ならではの目で、心象的かつ科学的に山をとらえた写真集です。」

新鮮なアングルからの写真は、山のベテランの目も引きつけることでしよう。そこには、新しい山の発見があるからです」と。

空撮のポイントとは自由空間からの視点にあることは論を待たないが、雄大な山には少し高目の高度からスケールの大きさを狙い、迫力を出そうとする。山は同じ高度からの空撮で、美事にその山の特徴を引き出そうとする。その著者の眼はしたたかである。

特に、高度五一〇〇mからの「初冬の富士山頂面」、一二〇〇mからの「初

かような鳥の目ほもはや写真芸術の世界といえるのではない。いろんな理由で、山に距離を置きつつある人、既に距離を置いてしまっている人々には、書斎での山登りをより一層楽しいものにしてけると共に、現役で山に登っている人々にも別の角度からの山の素晴らしさを教えてくれる。

ほかに地図とカラーで立体編集した写真地図帳として、「北アルプス稜線を飛ぶ」―空からのピーク・ハントハワイドカラー版、空撮登山ガイド・シリーズとして、「北アルプス編」、「南アルプス編」、「中央アルプス・八ヶ岳編」、「尾瀬・桧枝岐編」などが出版されている。

一九八七年十月一日、山と溪谷社刊、定価二五〇〇円。

追悼

―越後岳人の粹「玄さん」に学ぶ―

越後支部副支部長 上村 幹雄

昭和三十六年の夏、著者は初めて石垣島へ渡り、鳥居や社殿のない、樹木に囲まれただけの、何もない御嶽という神を祀る森の存在を知った。以来、対馬海流の流れに沿って、沖縄から若狭へと、その特異な森の聖地を訪ね歩くのである。

その鬱蒼と樹木の生い茂る森は、五穀豊穡をもたらす神の御在所であり、悪霊からの守護神を祀り、あるいは祭所、墓所ないし葬所であつたようだ。信仰の形は異なるものの、また、ガジユマル、アコウ、タブ（タモ）、椎、楠、檜などと森を構成する樹種こそ違え、住民たちは一様に、立木を伐ることはおろか枝葉をとり去ることを禁じ、畏怖の念をいだきながら森の信仰を守ってきたという。

本書に記された「聖なる神の森」

更に「森」といえば山名の、瓶ヶ森（山）、堂ヶ森、嶮岨森、矢筈森などが、また更に、各地の山名に使われるところの、「丸」、「塚」といった用法にまで思いを馳せるのである。

著者には、外に『柳田国男の青春』、『島の精神誌』、『島——水平線に棲む幻たち』など多数の著書がある。

一九八七年十月、東京書籍刊、二〇五頁、一〇〇〇円

(安藤忠夫)

森林のなだれ防止機能

新田隆三執筆

本書は雪深い山間部に多勢の人が暮らして往來している我が国では、なだれ死者の約五割を住民被災が占めていることを指摘している。つまり後の五割は、登山者やスキーヤーなどのなだれ死者があることになる。そして、なだれと森林との歴史的なかわり、なだれのメカニズムと森林の機能、森林のなだれ防止機能向上の手だてを中心に紹介すると書かれてある。

日本でも、森林のなだれ防止効果は昔から経験的に知られていた。江戸時代には、留山または止山（とめやま）と称して住民の森林への立入り、伐採、狩猟を禁じた保護林があったという。この止林を伐つてしまったためになだれに襲われた例も紹介されている。又、広瀬潔氏が作成された戸隠神社奥社のなだれ災害の年譜は、七〇〇年間の記録を残しており、一地点を襲ったなだれ災害の記録として世界最長のものであるという。

執筆者はスイスでもなだれの勉強をしたが、ヨーロッパでは十世紀以来、アルプス高地を牧畜生産の場として活用したため、森林は疎林となり、森林

玄さんは少年の頃、父に「あっちの山は何んだろ」と聞いた。「いっち速おこて白いらい山が、飯豊山だろ」と、「いっばいこと雪があつて、熊らの大蛇が住んでいて、だつても登らんねがんだろ」と教えられた。そして信濃川河畔から見える「新潟から見える山々」の全てを登り尽くす念願を立てた」と、他に追従を許さぬ山の案内書の範囲を遥かに凌駕した名著「越後の山旅」上下のあとがきに記されているが、それを生涯を通して実現され、山に生涯を捧げ、越後の山に生き抜いた「玄さん」であつた。

支部結成二十周年記念、新潟県境全山縦走踏査登山等の行事は枚挙にいとまないが、里見八犬士を遙かに凌ぐ、煌ら星の如き壮々たる県下岳人を輩出し支部会員二百數十名を擁し、それぞれが単一山岳会を設立し、また指導的立場に立つて後輩の育成、登山道、施設の整備、登山の振興に努め、県下一つに纏つての一指も揺るがぬ体制は「玄さん」なくしては為しえぬ底力であり、偉大な人柄のしからしめるところであった。

或る時は「君臨」でもあったらうし、或る時は「法王」であっても、底に流れる下町の庶民的な屈託ない心の暖かさ、優しさが、皆に「玄さん」「玄さん」と親しまれ、慕われ、何時でも、お忙しいのに、お宅には誰彼もなくお訪ねして、美しいサイ子奥様も加えて、賑やかに、一杯や歌声があつた。そして、玄さんは何時も脇でにこにこしておられた。先生はよく私に「兵隊のいない、何時でもツツと言えばカーと動く兵隊のいない長は、リーダーではない」と言われた。人柄なくしては人は付いて行くまい。飯豊の山麓の山民は、玄さんを神様と敬い且つ慕つた。そんな秘訣も玄さんにはあつたが、その元も、底の暖かな、そして鋭く眞実を見抜く純粹な心の持ち主であつたからであらう。

支部機関誌「越後山岳」編集は越後の岳人から寄せられた原稿を一字一字丁寧に、ご自分で清書され、さらに何回も何回も直しては書き直しておられた。越後の山を愛する情熱、越後を誇りとする自負、何事も忽せ<sup>ゆるが</sup>にしなない心血を注いでの誠実な「玄さん」を、ここに驚異と畏敬で見た私であつた。先生、あの飯豊の杵差岳の春には純白のハクサンイチゲの一杯咲く寿像で、私達を見守つていて下さい。少しでも先生を見習つて「よりよき岳人へと努力していきます」。

ご冥福をお祈りして

森林は、小さななだれに対しては、防御の効果が大きいが、発生してしまつた大きななだれに対しては百年生以上の森林でもなぎ倒されてしまうことがあるという。

植生の高さと密度が増加するほどなだれの発生率は減少し、標高が高くなるほどなだれ発生率は高く、冬季の主風向に平行な向きの斜面、いいかえれば南風をうける斜面でなだれの発生率が最も高いという。

このようにしてこの小冊子は、表題にいうように、森林のなだれ防止機能についてわかりやすく説明している。人々のかけがえのない命を守るなだれ防止機能からいっても、森林の育生が大切なことがよくわかり、いいかえれば森林の自然保護がいかに大切かということをこの本から教えらるるのである。

昭和六十二年十二月刊、五四ページ、定価五〇〇円、(社) 日本治山



治水協会  
報告

(武田満子)

## ヒンズークシユ真只中の旅

(支部創立30周年記念事業)

福岡支部

一行十人は、ラワルピンディから陸路ギルギットに入り、ここからカラコルムハイウェイを通り、クンジュラダ峠まで往復した。ギルギットからギルギット川沿いに、ガクーチを通り、グピスからヤスイーン、さらにダルコットまでの計画であったが、ヤマインを過ぎてすぐのナズ谷の橋が壊れていたのでため引返し、ギズル川沿にテルーを通り、シャンドール峠からチトラルに入った。チトラルでは、カラツシ族のボンボレット村を訪ねた。チトラルから空路ベシャワールに入った。その夜、シャザード・ブルハン・ウ・ディーンさんから夕食のご招待をいただき、トレッキングの最後を飾るよい思い出となった。

シャングリラの地、フンザの切り立つ峰々と狭い谷、そしてヒンズークシユの山々と広く明るい谷の好対照に今回のトレッキングの妙味が感じられるとともに、アフガニスタン難民問題と大統領暗殺事件など、政情不安の中でも、逞しく生きている辺境の地の人々との出会の十六日間のトレッキングであ

あった。

(期間)八月十三日(八月二十六日)

参加者 権藤太郎、吉村健児、新貝勲、深田泰三、大石正人、佐野昇三、足達敏則、野田裕、山井朝徳、副島勝人

## ビアパーティ

婦人懇談会

九月三日、婦懇のビアパーティは五時から開かれました。出足は良く、早々に盛会の感がありました。マウント・シヴァのメンバーもつぎつぎと見え、登頂の成功と、ビアパーティを祝して、黒石恒さんが乾杯の音頭をとられました。

隊長の田部井淳子さんは、会員の皆様へのお礼と、遠征登山の苦楽などを、さらりと話されました。

今回の当番は、会員番号末尾一番のつく会員が選ばれました。テーブルには、主役のビールはドライで揃い、用意された料理が置ききれない程です。それに、印度のお土産、カレー味のナッツ類や、豆の粉とスパイスで練って薄くした、塩味センベイ風の、パバードというものは、ビールにとってもよく合いました。差入れの品々も増えて、宴たけなわとなると、もうルー

ムは身動きがとれず、一言でもお話ししたいと思う面々に近付くのも容易ではありませんでした。それでも和気あいあいの中で、山の情報交換が聴かれま

した。最後に、婦懇の有志が、心をこめて作ったお赤飯が出されました。祝宴にふさわしいそのタイミングといい、お腹も気分も充実したところで閉会になりました。今日の参加者は九十五名の盛況でした。

山の女性のこまやかさと、おおかさのあふれたこの催し、永く続いていきますように。昨年度新入会の私も感激一ぱいで、この原稿を書かせて頂

(高澤佐恵子)

## 蝦夷お月見会

北海道支部

北海道支部の観月会は、回を重ね十七回となる。今年は、岩内町森林公園に在る勤労者体育センターを拝借し、お月見会処とした。

岩内町は、開基三三〇年余りの遠い歴史があり、鯉の千石場所として栄え有島武郎作「生れ出づる悩み」の名作モデルの故郷で、漁業の町として、またニセコ積丹小樽海岸国定公園の雷電海岸を有し、ロマンと伝説の景勝地である。

十月一日は、月齢二十一、本来なら前週が、適当なのだが、三日連休は、勿体ないとの話があり、降り月の月見会となった。午後四時、現地に着くと、岩内の佐々木会員が指揮をとり、

大テントが体育センターの前庭に設えられ、入口に日本山岳会お月見会場の看板が掲げられ、矢印でエベレスト街道、そしてテントはチョモランマ亭と名付けられている。六時、善民和尚の読経により、二月五日、黄泉の客となった、故兼平治水氏の供養をしてキャンプファイヤーに点火、チョモランマ亭には、鮭のチャンチャン焼、枝豆、芋団子甘辛、イクラ丼、メロン等山海の珍味盛沢山である。ビール、酒、ウイスキーが一巡すると、自己紹介、芳賀副支部長の挨拶で「先ず自分達が楽しむのが最大の歓迎と考える」に地元、岩内の方々の心が解かれ、JACの会員になりきった夫妻も数組あり、本当に楽しい観月会の夕べであった。

翌二日、六、七人は岩内岳登山、足弱酒強組は岩内魚祭へと繰り出した。昨夜の岩内港の夜景、泊原発、イカ釣舟の漁火、美味の数々、岩内の皆さんの心尽しに深甚の感謝をして散会した。

参加者 久保田優一、牧野洋子、河村皆子、桜井仁、横田春雄、三浦勝幸、柳田凉子、木下恵子、藤野和男、上島



## 図書受入報告

### 図書委員会

#### 昭和 63 年 5 月分受入図書

1. 在田一則著「ヒマラヤはなぜ高い」青木書店 1988 (著者寄贈)
2. 本多勝一著「五〇歳から再開した山歩き」朝日新聞社 1987 (著者寄贈)
3. 前田真三著「四季山水」日本カメラ社 昭和 62 (版元寄贈)
4. 松本栄一著「極限の高地チベット世界」小学館 1988 (版元寄贈)
5. 西口正司著「白神岳」岩崎村むらおこし事業推進委員会 1988 (著者寄贈)
6. 宇都木慎一編「探検と冒険 第4集(上)」宇都木慎一 1988 (編者寄贈)
7. 金井弘夫著「ヒマラヤ地名索引」第5版 日本ネパール協会 1988 (著者寄贈)
8. コリン・フレッチャー等著 芦沢一洋訳「遊歩大全」森林書房 1987 (版元寄贈)
9. 金剛寺拳著「カラー版 立山・剣・黒部」東京新聞出版局 1988 (版元寄贈)
10. 関西大学体育会山岳部編「清家うすゆき君追悼集」関西大学体育会山岳部 昭和 63 (編者寄贈)
11. 名古屋大学体育会山岳部著「名古屋大学インド・ヒマラヤ登山隊報告書」名古屋大学体育会山岳部 昭和 63 (著者寄贈)

#### 6 月分受入図書

1. 中保著「日本縦断徒歩の旅」中保 1988 (著者寄贈)
2. 原真著「頂上の旗」筑摩書房 1988 (版元寄贈)
3. 高崎経済大学山岳部OBヒマラヤ登山隊著「クーンプの白き守護神」高崎経済大学山岳部OBヒマラヤ登山隊 1988 (著者寄贈)
4. 尾崎喜八著「尾崎喜八詩文集 1-10」創文社 昭和 34-50 (購入)
5. 新田隆三著「森林のなだれ防止機能」日本治山治水協会 昭和 62 (著者寄贈)
6. 工藤隆雄著「ひとり歩きの登山技術」山と溪谷社 1988 (著者寄贈)
7. ベルニナ山岳会著「ベルニナ 40」ベルニナ山岳会 昭和 63 (著者寄贈)
8. 生駒勘七著「御嶽の信仰と登山の歴史」第一法規 昭和 63 (版元寄贈)
9. 追悼文編集部編「雪の断章」ウータン通信社 1988 (ウータンクラブ寄贈)

10. 内田良平著「上高地」時事通信社 1988 (版元寄贈)
11. 東奥日報社出版部編「八甲田賛歌」再版 東奥日報社 昭和 61 (版元寄贈)
12. 木村至宏編「近江の山」京都書院 1988 (版元寄贈)

#### 7 月分受入図書

1. 金坂一郎著「山岳技術考」金坂陽子 1988 (金坂陽子氏寄贈)
2. 長沢武 高野悦子共著「おいしく食べる」信濃毎日新聞社 昭和 62 (版元寄贈)
3. 葛谷孝著「八甲田の花」北の街社 1987 (版元寄贈)
4. 福島常作著「八甲田の山」北の街社 昭和 62 (版元寄贈)
5. 林正康著「長崎県の山歩き」葦書房 1988 (版元寄贈)
6. 吉川満著「九州の沢と源流」葦書房 昭和 62 (版元寄贈)
7. 平石敏吉著「足で見る山」創元社 昭和 63 (著者寄贈)
8. 月刊タウン情報とやま編「とやま山歩き」CAP 1988 (版元寄贈)
9. 平口善朗 斎藤多積共著「南アルプス山行記」サンブライト出版 1986 (版元寄贈)
10. 藤原優太郎著「秋田の峠歩き」無明舎 1987 (版元寄贈)
11. 望月達夫 岡田昭夫共著「蔵山廬塵」茗溪堂 1988 (版元寄贈)
12. 木南金太郎著「日本の山登り記」茗溪堂 昭和 63 (著者寄贈)
13. 伊藤嘉治著「写真集 信州の名峰 80」編集工房らかぼし 昭和 62 (版元寄贈)
14. 原高義著「画文集 北の山野草」北海道新聞社 昭和 62 (版元寄贈)
15. 富士元寿彦著「サロベツの四季」北海道新聞社 昭和 62 (版元寄贈)
16. 筑木力著「山頂へのみち」ほおずき書籍 1987 (版元寄贈)
17. 田中豊雄著「長野県野の花山の花」ほおずき書籍 昭和 62 (版元寄贈)
18. 堺沢虎一著「山に生きる」堺沢虎一 昭和 61 (信濃毎日新聞社寄贈)
19. 第二アートセンター編「山・やま事典」大修館書店 昭和 63 (版元寄贈)
20. アイビー出版編「幽境・岩手の釣り」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
21. 金沢ナカオ山岳会著「県境踏破 250 キロ」能登印刷出版部 昭和 62 (版元寄贈)
22. 札幌山岳会「ナンガパルバット登山報告書」札幌山岳会 1988 (版元寄贈)

## 会務報告

### 九月理事会

九月八日、午後六時三十分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚、村木両副会長、早坂、浜口、小林、織田沢、太田、大橋、鈴木、橋本、岡沢、大森、勝山、嶋原、関塚、西村各理事、山野井、小倉、松田、平林各評議員、太田、山本監事

委任 新井、田部井各理事

審議事項 なし

報告事項  
総務Ⅱ年次晩餐会の準備状況、山岳会絵はがき用候補フィルム準備について。

山岳Ⅱ「山岳」八十三号目次内容決定、追悼のページが一部次年度掲載となる。

会報Ⅱ原稿は締切日までに、口頭で

忠義、米村清一、宮園章、芳賀孝郎、中嶋英彦、中嶋政子、沼崎勝洋、菊地泉、亀井秀子、井出雅人、加藤高志、船場俊己、伊藤澄夫、山田智、佐々木善民、佐々木則子、松本道也、木村政治、木村富貴子、福田勝治、福田美智子、松井玲子、佐々木利幸、桜居正己、倉嶋宗興、比企伊佐己、平野明、(平野 明)

の依頼の場合は後日文書にて送稿を。

▼三国〓七月十四日、日・中・ネ三国  
総隊長による座談会開催。隊荷すべて  
日本に帰着、九月末登山隊事務所を閉  
鎖予定。

▼海外〓九月七日「南極の話あれこ  
れ」開催。

▼図書〓棚卸し終了。不明本和書三十  
冊、洋書三十六冊、重複本(二冊以  
上)和書二百七冊、洋書百八十九冊。  
十月二十二日図書交換会予定。

▼山研〓今年度の利用状況中間報告、  
三百二十六人で例年の約二百人減少。

▼山日記〓内容変更のため、再度見積  
依頼中。

▼フィルム〓十月二十五日「映像の変  
遷」講演会予定。

▼婦懇〓シヴァ登山概要報告。九月三  
日ビアバーテイ開催、参加九十三名。

▼自然保護〓七月二十日「屋久島のロ  
ープウェイ計画の中止」を求める要望  
書を、環境庁自然保護局長及び関係各  
所に提出。環境庁長官は保護地区内の  
遊歩道は認めない旨上屋久町に通知。

九月三、四日自然保護全国集会を開  
催、出席九支部三十七名。テーマ「山  
岳地域に於ける大規模開発」

▼医療〓各大学による夏山診療所終  
了。「低圧室によるトレーニング」の効  
果について」講演準備中。

▼科学〓七月十六、十七日探索山行

「九頭電信仰」開催、参加四十名。  
▼学生Ⅱ学生部韓国山行および、今夏山期間中の加盟校の事故について報告  
●「未来ビジョン」策定について資料配布と補足説明。



(9月)

- 2日 常務理事会
- 3日 ビアパーティ
- 5日 総務委員会
- 7日 海外委講演会「南極の話」
- 8日 理事会
- 12日 海外委員会
- 13日 科学委員会
- 14日 登山報告会(広島・本多)
- 19日 総務委員会
- 20日 図書委員会
- 21日 山研委員会、三水会

- 26日 常務理事会
- 27日 自然保護委員会
- 28日 フィールド委員会
- 29日 資料委員会
- 9月来室者393名
- 会員異動 9月
- 物故
  - 小島隼太郎(三四五二) 9・7
  - 藤島 玄(一〇三三) 9・11



☎ 234-6659

この電話で  
お知らせ  
しています

### ◎昭和六十三年年度

#### 年次晩餐会のお知らせ

日時 昭和六十三年十二月三日(土)

午後六時より

場所 アルカディア市ヶ谷(私学会館)

会費 一万円

バー開設、受付開始

午後四時三十分より

・晩餐会記念山行について

三浦半島の最高峰・大楠山に登ります。

集合 十二月四日(日)午前九時三十分

横須賀線衣笠駅。雨具、昼食をご用意下さい。

総務委員会

### ◎チヨモランマ登頂時の

#### 気象講演会

三国友好登山隊は素晴らしい天気恵まれて五月五日チヨモランマの交叉縦走に成功した。

この日の前後、日本から気象予報を送り続けた奥山予報官と、現地において観測と、天候判断を行なった宮田隊員をお招きして、気象予報と現地の天候が、どのような点で一致し、または相違したかについてもお話を伺う。

このような問題に関心をお持ちの方々多数のご参加をお待ちしております。

日時 十二月九日(金)午後六時半

場所 日本山岳会 集会所

講演題目と講師

一、チヨモランマの気象予報

日本気象協会予報部 奥山 巖

一、現地における気象観測結果

広島大学教授 宮田賢二

科学研究委員会

### ◎忘年会のお知らせ

忘年会を左記に依り催します

日時 十二月十日(土)午後五時より

場所 日本山岳会 集会所

開催時間繰りあげました。地方会

員新入会員の参加大歓迎!! 飲みノ

語りノ 食べるノ オール放題!!

の会

総務・集會・婦懇委員会共催

編集後記 このところ原稿の数が増え、後回し、時機遅れとなり、そして没になるものが始めました。

▼どの原稿をとっても没にはしがたいものがあり、今回は二〇ページとし、この傾向を一気に解消することにしました。

▼今、校正は梅野淑子、小倉厚の両氏に手伝ってもらっていますが、忙しいポストで仕事をしている人々でもあり、増ページは物理的に不可能と思われまふ。

▼原因はいろいろありますが、その一つに長すぎる原稿があります。▼聞くところによりますと、最近の高校では、与えられたテーマについて、指定された字数で、小論文を書くという時間があるそうです。

▼ここで言いたいことが何か、はもうお分かりでしょう。(〇)

昭和六十三年十一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一三三六

印刷所 株式会社 技 報 堂